



京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

× 河合塾

学校と社会をつなぐ調査 第1回調査(2013年秋実施)

**結果報告② 調査参加校の事例分析**  
**—新教育課程下における高校の実態と課題**



立命館大学 理工学部  
椋本 洋

# 本日の概要

## 1. はじめに

—社会の変化による能力観の転換と学習指導要領の学力観

## 2. トランジション調査から見える学校現場の実態

### (1) 学校タイプと家庭学習時間との関係

(含, 家庭学習時間と部活動時間)

### (2) 主体的に学ぶ力

家庭学習時間と主体的に課題に取り組む態度

### (3) 豊かな対人関係と活動性

### (4) 将来への意識

## 3. まとめ

# 1 はじめに

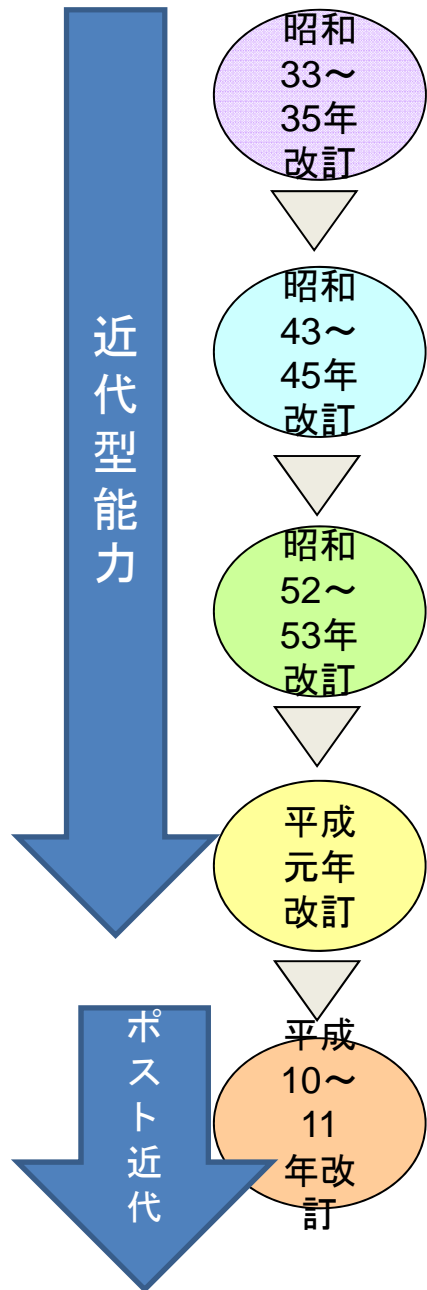
## — 社会の変化による能力観の転換と 学習指導要領の学力観

# 知識基盤社会 (knowledge-based society) と 能力観の転換

「近代型能力」	「ポスト近代型能力」
「基礎学力」 標準性 知識量・知的操作の速度 共通尺度で比較可能 順応性 協調性・同質性	「生きる力」 多様性・新奇性 意欲・創造性 個別性・個性 能動性 ネットワーク形成・交渉力

本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』

# 学習指導要領の変遷



**教育課程の基準としての性格の明確化**  
(道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等)  
(系統的な学習を重視)

教育水準  
の向上

(実施)  
小学校:昭和36年度、中学校:昭和37年度、高等学校:昭和38年度(学年進行)

**教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」)**  
(時代の進展に対応した教育内容の導入)  
(算数における集合の導入等)

マンパワー

(実施)  
小学校:昭和46年度、中学校:昭和47年度、高等学校:昭和48年度(学年進行)

**ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化**  
(各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる)

能力主義  
の徹底

(実施)  
小学校:昭和55年度、中学校:昭和56年度、高等学校:昭和57年度(学年進行)

**社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成**  
(生活科の新設、道徳教育の充実)

臨教審

(実施)  
小学校:平成4年度、中学校:平成5年度、高等学校:平成6年度(学年進行)

**基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成**  
(教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)

PISAショック  
能力観の転換

(実施)  
小学校:平成14年度、中学校:平成14年度、高等学校:平成15年度(学年進行)

学習指導要領のねらいの一層の実現の観点から  
学習指導要領の一部改正 (平成15年)

# 高等学校教育を通じて身に付けるべきもの

## ■ 確かな学力(学校教育法第30条2項)

ア. 基礎的・基本的な知識・技能

イ. 基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する力(思考力・判断力・表現力等)

ウ. 主体的に学習に取り組む意欲・態度

## ■ 豊かな心

## ■ 健やかな体

## • 社会・職業への円滑な移行に必要な力・市民性

一「初等中等教育分科会高等学校教育部会の審議まとめ案について」(平成26年3月中央教育審議会高等学校教育部会)

# 高等学校学習指導要領における活用力(思考力・判断力・表現力等)の育成や教科横断的な指導について 【主なポイント】

- 総則

○基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

○各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実する。

\*各教科等を通じて、説明、論述、討論、批評等の言語活動を充実。

# 総合的な学習の時間

○課題発見・解決能力、論理的思考力等を育成するため、**教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、生徒の興味・関心等に基づく学習**など創意工夫を生かした教育活動を行う。

※各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする。

\*各教科等を通じて、説明、論述、討論、批評等の言語活動を充実。

○国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

• ○情報を主体的に活用する学習活動を重視する。

一中教審高大接続部会配布資料5-2



# 学習指導要領の「習得」、「活用」、「探究」の関係

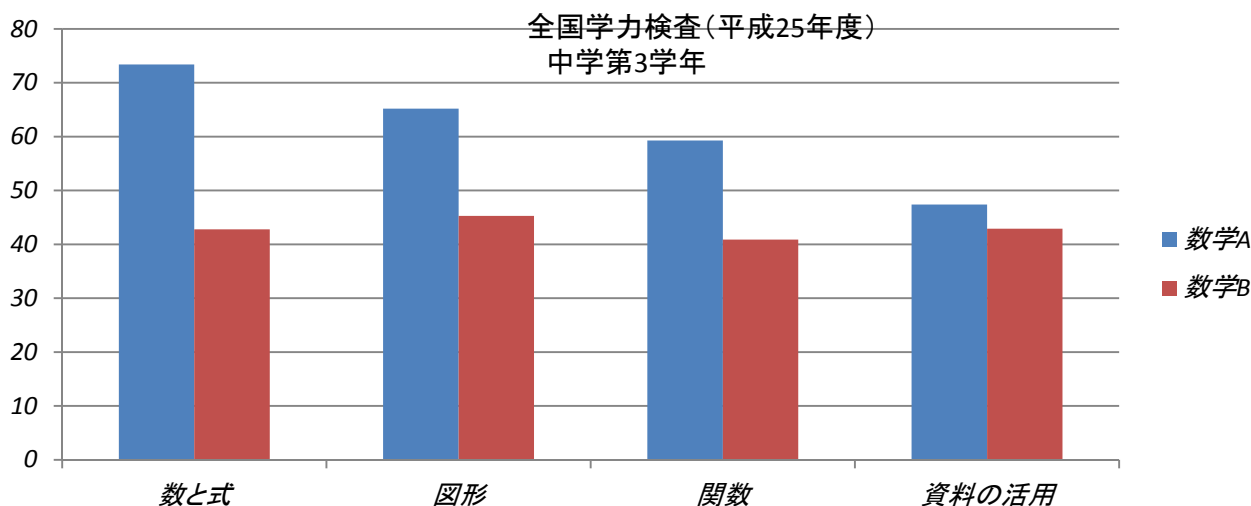
- ①「基礎的・基本的な知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力等」は子どもに身に付けさせるもの、「習得・活用・探究」はそのための学習活動の類型を示したものである。
- ②各教科では、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」とともに、観察・実験をしてその結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を行う。それを総合的な学習の時間等における教科等を横断した問題解決的な学習や「探究」活動へと発展させる。
- ③これらの学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではない。
- ④各教科での「習得」や「活用」、総合的な学習の時間を中心とした「探究」は決して一つの方向で進むだけではない（「習得→活用→探究」の一方通行ではない）。
- ⑤これらの学習の基盤となるのは言語に関する能力であり、そのために各教科等で言語活動を充実。

一文部科学省初等中等教育局教育課程課 「新指導要領Q&A」

# 高校入学前まで知識と活用力の実態

## 【例】 数学

### 知識(数学A)と活用(数学B)の比較



生徒数	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差	最頻値
1,070,833	23.1/36	64.30%	25	8	29
1,070,792	6.8/16	42.40%	6	4.1	3

R=0.8221であることから、知識がきちんとついていないと活用ができないことがわかる。

—国立教育政策研究所「解説資料」より作表

## 2. トランジション調査から見える 学校現場の実態

### 問題意識

1. 事例報告高校などを「高校生の7タイプ」をもとに分類し、家庭学習時間と部活動時間を測り、その傾向を明らかにする。
2. 家庭学習の内容を明らかにし、授業理解度との関係を探る。(因果関係ではない)
3. 活用型・探究型の学力へと発展する「総合学習」「HR活動」「学校行事」への積極的参加が行われているか？
4. 高校で新しい学力を育成するアクティブラーニングは実施され、生徒たちは積極的に取り組んでいるか？
5. 進学を含め将来へのまなざしは形成されているのだろうか？
6. おわりに、それらの問題意識を、溝上の先行研究{大学生調査研究}で示された「成長」のための3つのポイントと合わせて考察する。

# 問題意識

1. 学校タイプと教室外学習及び部活動時間を調べ、学習と部活の両立は具体的にどのように実行されているか？
2. 主体的な学習を促す教室外学習へと発展しているのか？

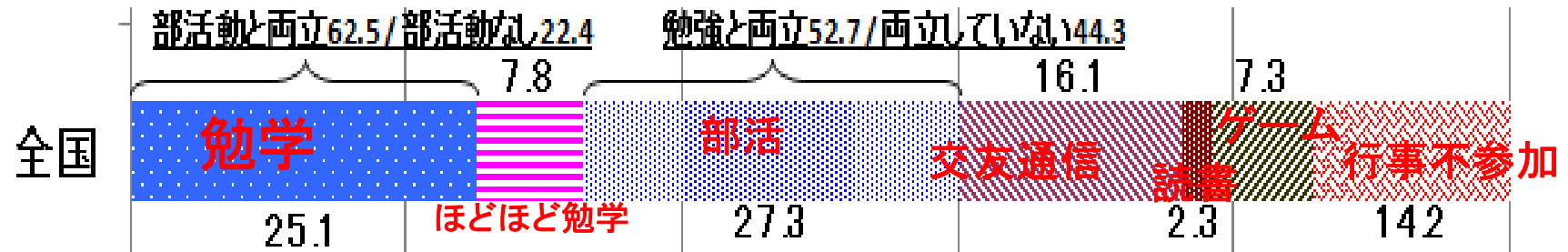
## **(1) 学校タイプと家庭学習時間との関係 (含, 家庭学習時間と部活動時間)**

高校を「高校生の7タイプ」をもとに分類し, 家庭学習時間と部活動時間を測り, その傾向を明らかにする。

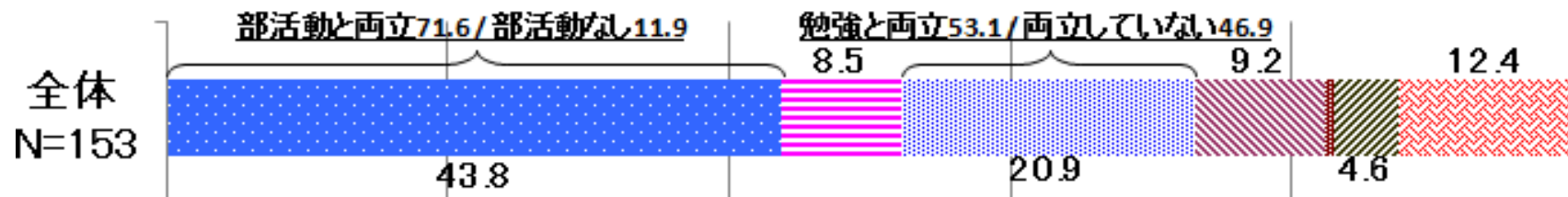
ここでは, 7タイプのうち, 「学習タイプ生徒の多い学校」「部活タイプ生徒の多い学校」「交友通信タイプの生徒が多い学校」の3つのパターンを取り上げた。残りのタイプについては, 学校の主だった構成要因になることは少ないものと考ええる。

# 学校タイプと学習時間

## 勉強タイプ生徒の多い学校の学習時間

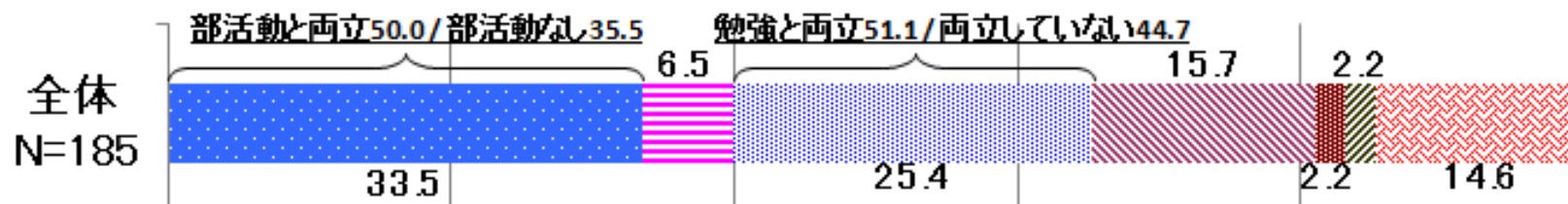


### 【例1】A高校



	平日		休日	
	時間	部活 学習	部活	学習
平均		1.42	2.14	2.99
中央値 (メジアン)		1.5	2	3
最頻値 (モード)		2	2	0
標準偏差		0.95	1.15	3.05
分散		0.9	1.32	9.32
範囲		5	5	12
最小		0	0	0
最大		5	5	12
信頼区間(95.0%)		0.15	0.18	0.48

## 【例2】 B高校の場合

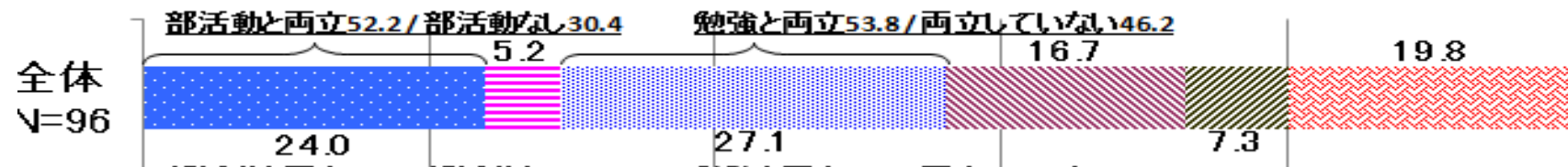


時間	平日		休日		
	部活	学習	部活	学習	
平均		1.36	2.26	2.12	3.28
中央値 (メジアン)		2	2	3	3
最頻値 (モード)		2	2	0	2
標準偏差		1.04	1.24	2.21	1.95
分散		1.07	1.54	4.89	3.78
範囲		3	6	10	11
最小		0	0	0	0
最大		3	6	10	11
信頼区間(95.0%)		0.14	0.17	0.31	0.27

どちらの学校も全国平均と比較して、勉強タイプが多い。以下に示すように、学習時間も平均的な高校生に比べると長く、部活動とうまくバランスを取りながら生活していることがうかがえる。

# 部活タイプ生徒の多い学校

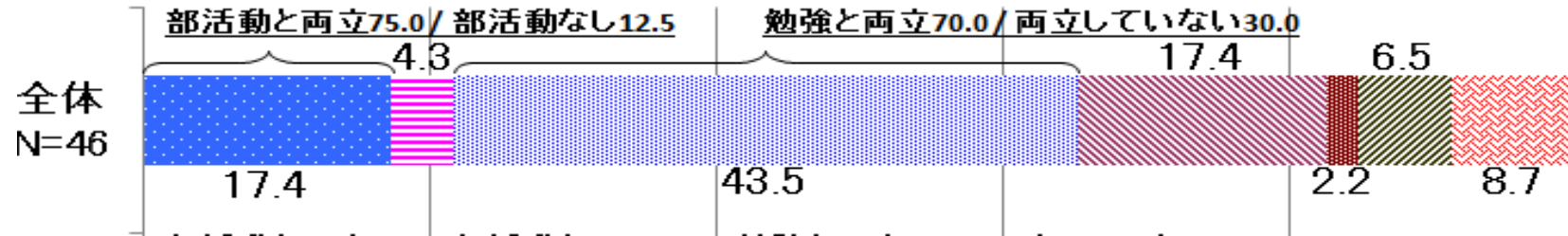
## 【例3】 C高校



	時間	平日		休日		
		部活	学習	部活	学習	
平均			1.5	1.8	2.64	3.01
中央値 (メジアン)			2	2	3	3
最頻値 (モード)			2	1	0	3
標準偏差			1.22	1.04	2.72	2.07
分散			1.48	1.08	7.39	4.27
範囲			4	7	10	10
最小			0	0	0	0
最大			4	7	10	10
信頼区間(95.0%)			0.14	0.21	0.55	0.41



# 【例4】 D高校

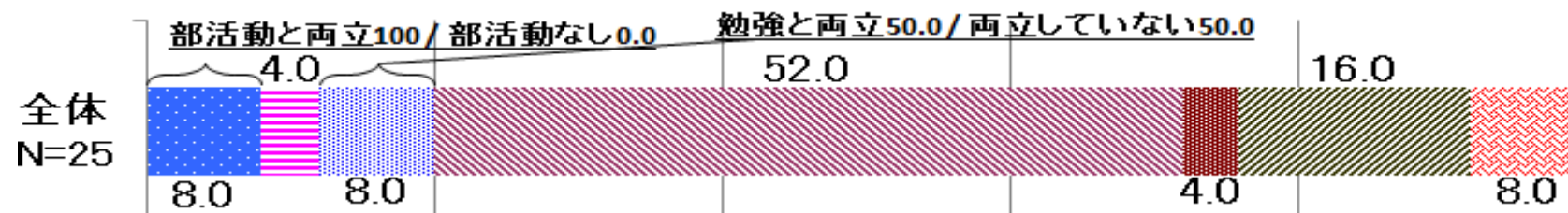


	時間	平日		休日		
		部活	学習	部活	学習	
平均			1.5	1.1	3.14	1.56
中央値 (メジアン)			2	1	3	1.5
最頻値 (モード)			2	1	3	3
標準偏差			0.89	0.78	1.95	1.21
分散			0.8	0.6	3.8	1.47
範囲			3	3	8	5
最小			0	0	0	0
最大			3	3	8	5
信頼区間(95.0%)			0.26	0.23	0.57	0.36

「過疎地」という条件の中で、部活動に取り組み、一定の家庭学習時間を生み出していることがわかる。報告集p.48～50参照

# 交友通信タイプ生徒の多い学校

## 【例5】 E高校



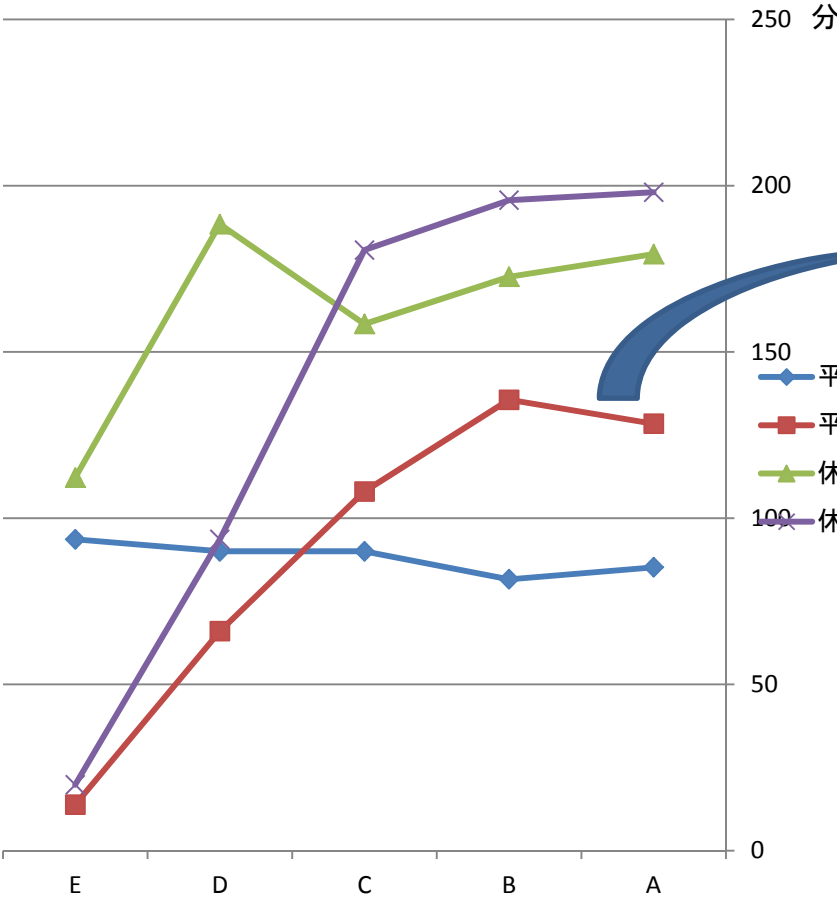
	時間	平日		休日		
		部活	学習	部活	学習	
平均			1.56	0.23	1.87	0.33
中央値 (メジアン)			2	0	1.5	0
最頻値 (モード)			2	0	0	0
標準偏差			1.19	0.47	1.98	0.66
分散			1.41	0.22	3.93	0.44
範囲			3	1.5	6	3
最小			0	0	0	0
最大			3	1.5	6	3
信頼区間(95.0%)			0.48	0.19	0.8	0.27

ヒヤリング調査によると、家庭的に恵まれない生徒も多く、中学時代は友人が持てない生徒もいた。学校の取り組みにより、明るさを取り戻し、友人も多くなっていることがわかる。

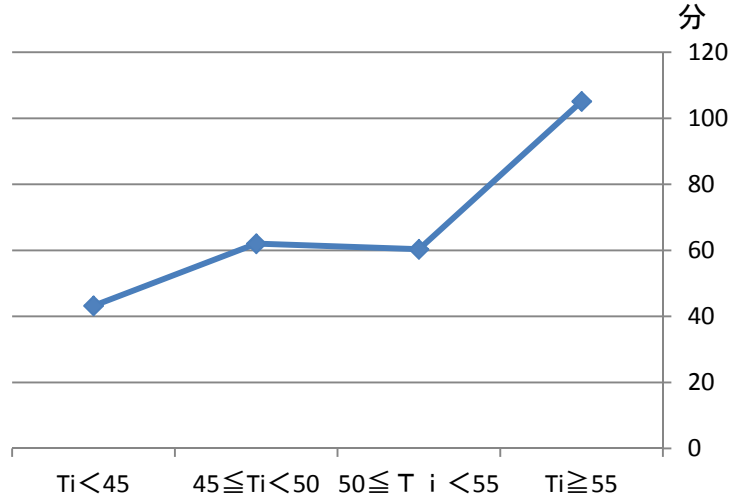
# 家庭学習時間に対するまとめ

平日・休日の部活/学習時間

平日の家庭での学習時間



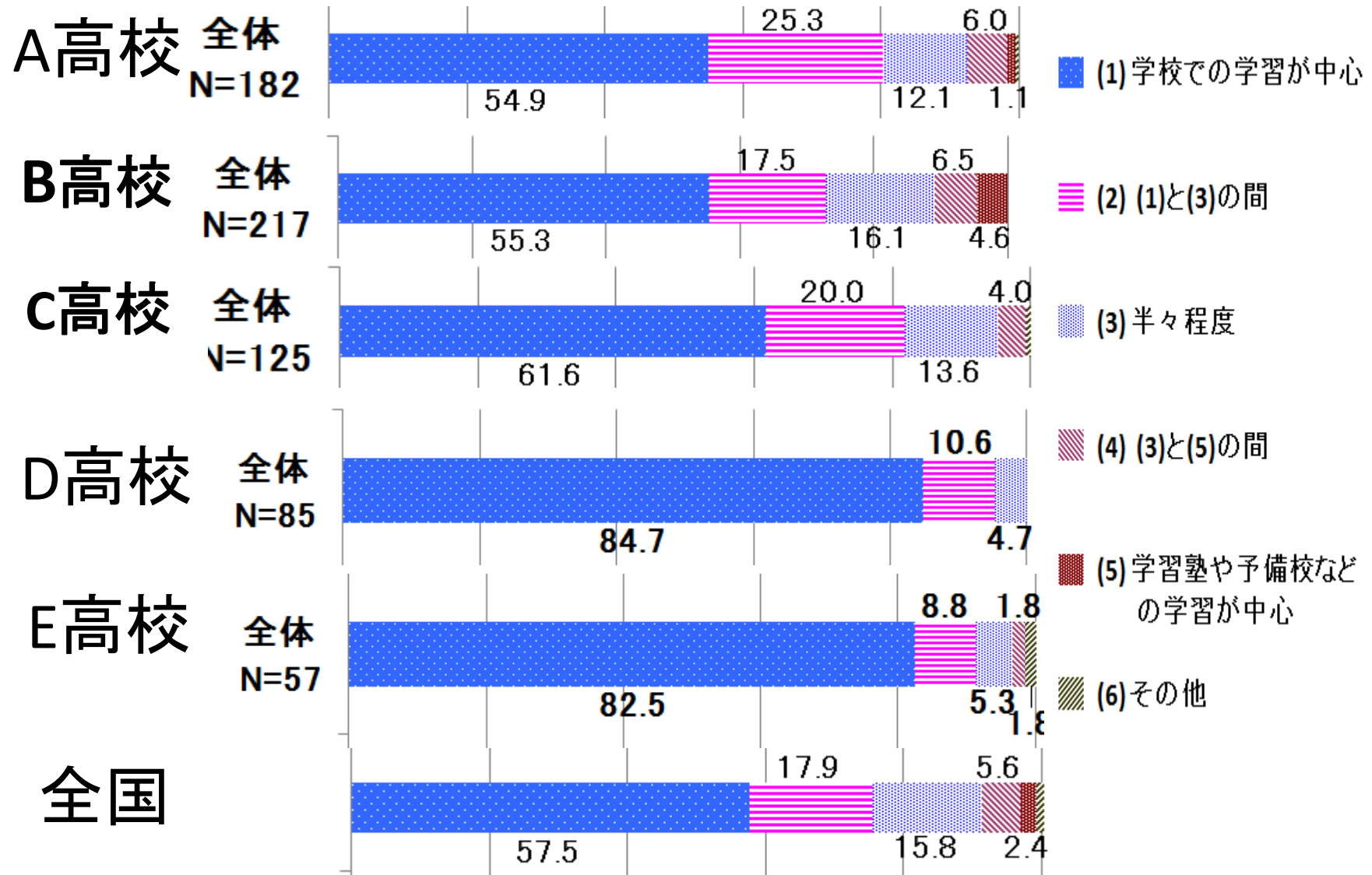
中教審高大接続特別部会資料  
(ベネッセ2006年調査)



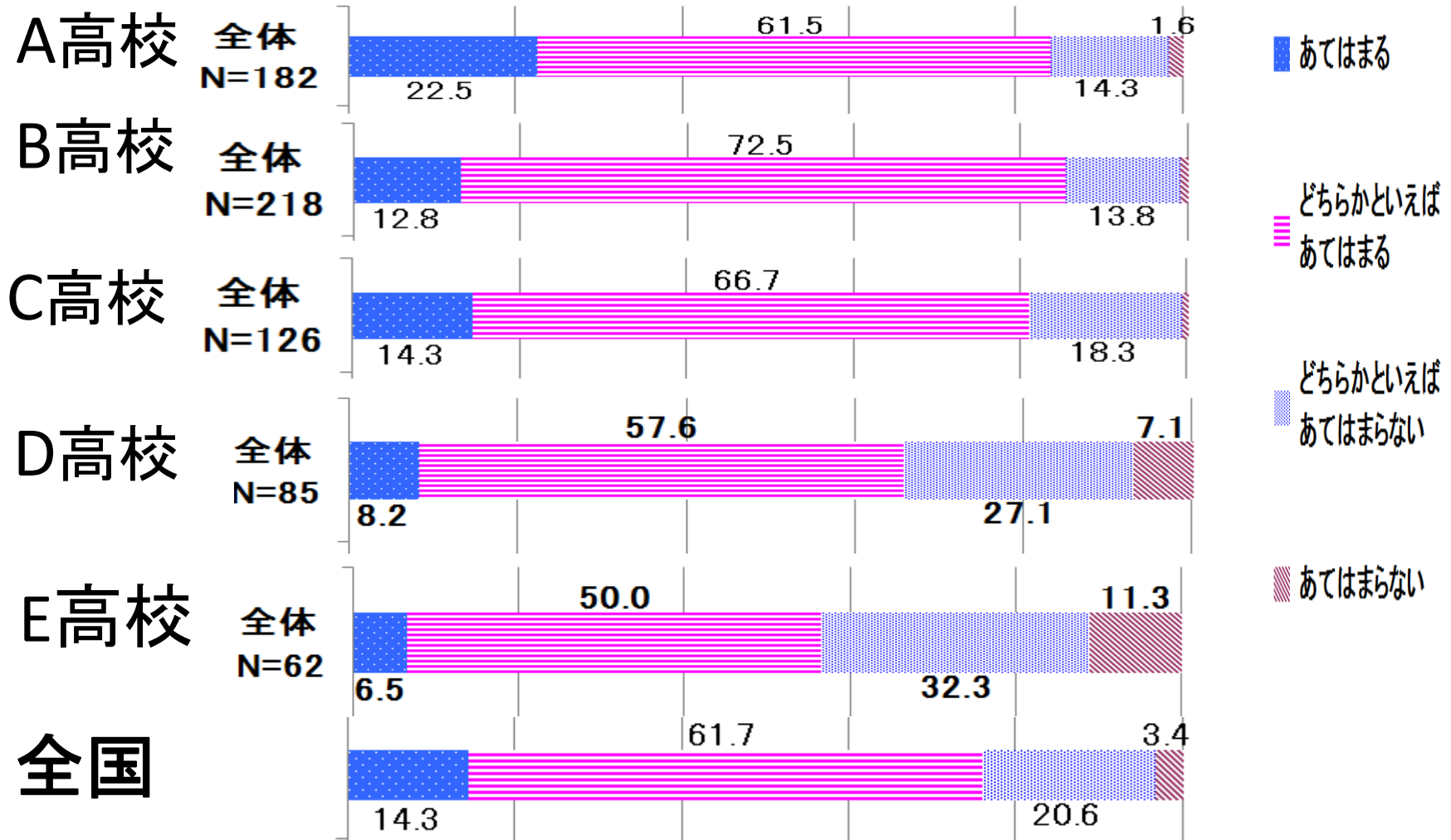
## (2) 主体的に学ぶ力 家庭学習と主体的に課題に取り組む態度

以上みてきたように、調査対象校別の平均家庭学習時間は、平日で15分～125分、休日で20分～198分であることが分かった。それでは、その学習時間における学習の内容はいかなるものであろうか。また、家庭学習によって授業への理解は深まっているだろうか。

# 各学校生徒の家庭学習内容



# 各学校生徒の授業理解度



## 主体的に学ぶ力を支える「知識」の理解・獲得

大学生研究から見えてきた学生の「成長」のためのポイントの1つは、「主体的に学ぶ力」である。そうした力のひとつを「教室外学習」で調べた。

現在、多くの進学校において、高校入学時における「初期指導」が行われている。その内容は、予習・復習の方法、授業の受け方、定期考査後に作成する弱点補強のための訂正ノートの作り方、習熟度別授業の流れ、一年間の学習の流れなどである。中学校の延長にならないように、高校での学習方法に転換させるのが目的である。

その後「予習」⇒「授業」⇒「復習」のサイクルを日常的に定着させる指導が行われている。そのため、学校は多くの「課題」を準備し、家庭学習のために提供している。この調査結果は、それぞれの学校がその延長上にあることを示している。

また、こうした効率的な学びが生徒の「理解」を進めているかについてはこの結果が示すように課題が残る。

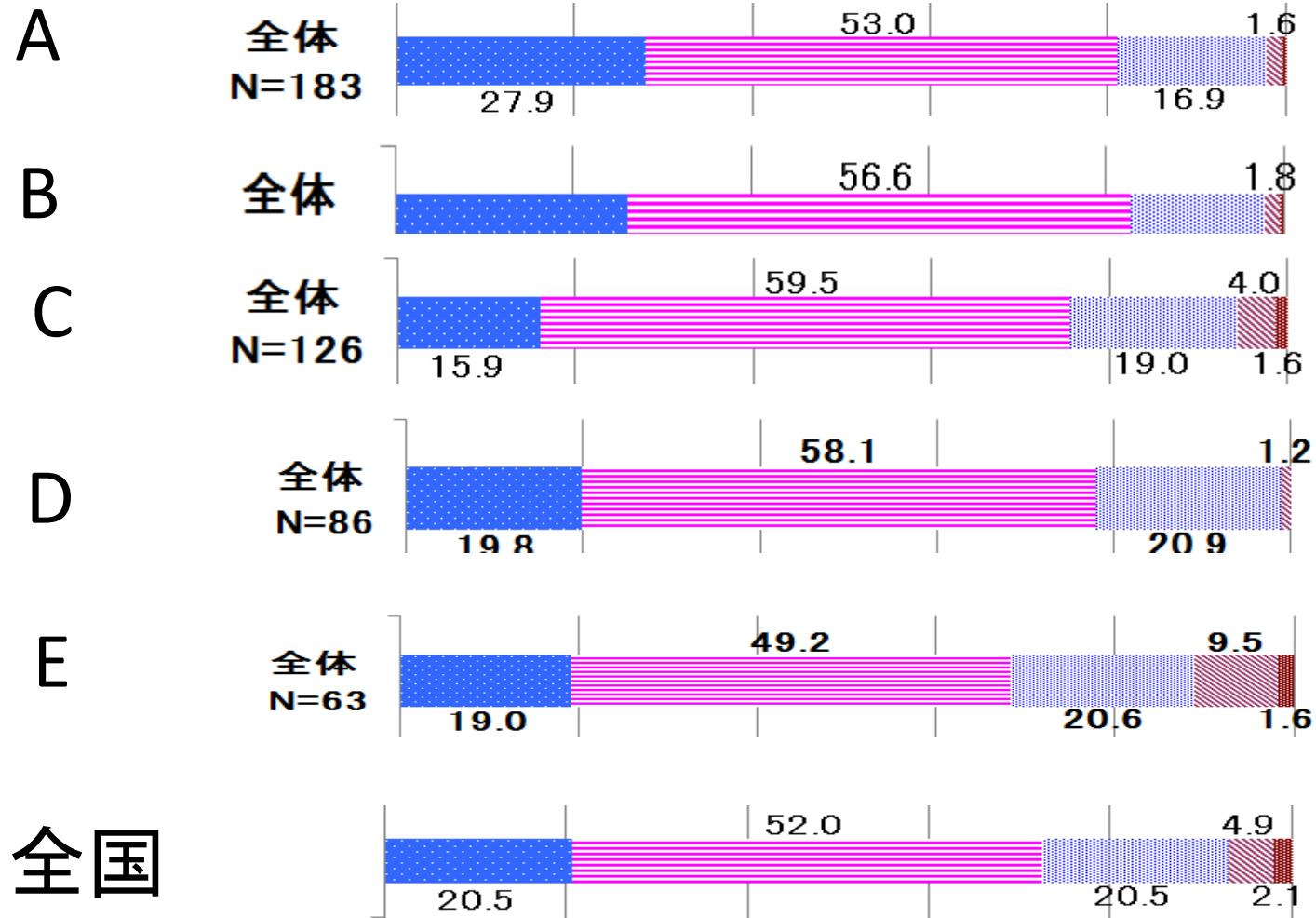
一方、効率優先や受け身ではなく、自主的な学びが必ずしも浸透していない。自立した学びに発展していくためには、どのような取り組みが必要であろうか。熊本県立熊本高校の取り組みに注目したい。

# 主体的に学ぶ力

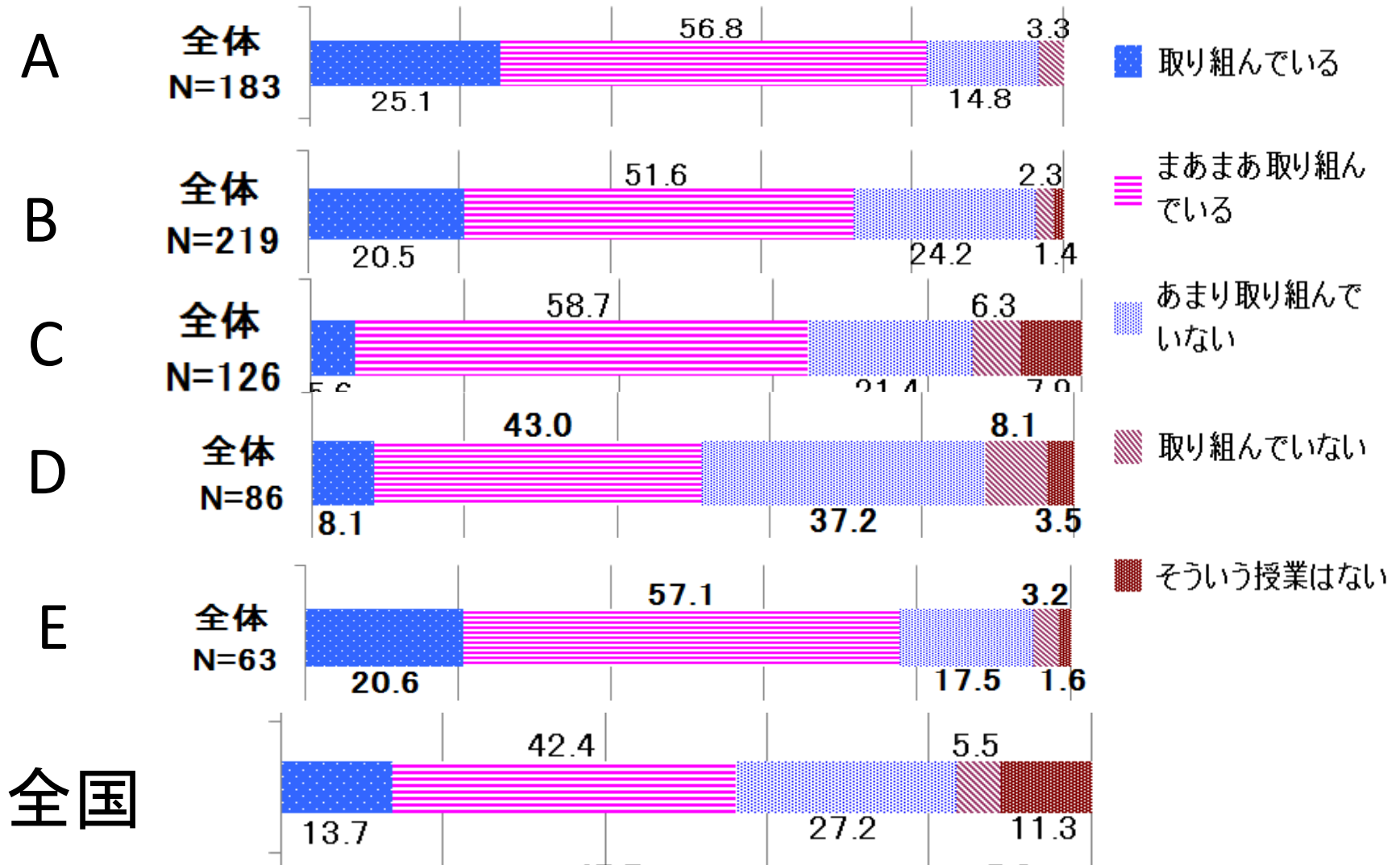
- 高校2年生たちの主体的に学ぶ力を前述「教室外学習」と「主体的に課題に取り組む態度」で測定した。後者は、『教科以外の学習(総合的な学習の時間やHR活動)に精いっぱい取り組んでいますか』および『授業におけるディスカッション・プレゼンテーションなどに精いっぱい取り組んでいますか。』という問で代用した。
- 以下、対照群として挙げた「島根高」も参考にしながら、成果を上げているかを明らかにする。。また、それらの成果はどのような「取り組み」がもたらすものであるか。各学校の事例報告が明らかにするであろう。
- また、島根県立横田高校の取り組みについては、報告書 p.56-59における「だんだんカンパニー」の取り組み、および、p.60-68の生徒ヒヤリングの報告を参照していただきたい。



# 教科以外の学習（総合的な学習の時間や HR活動）への取り組み



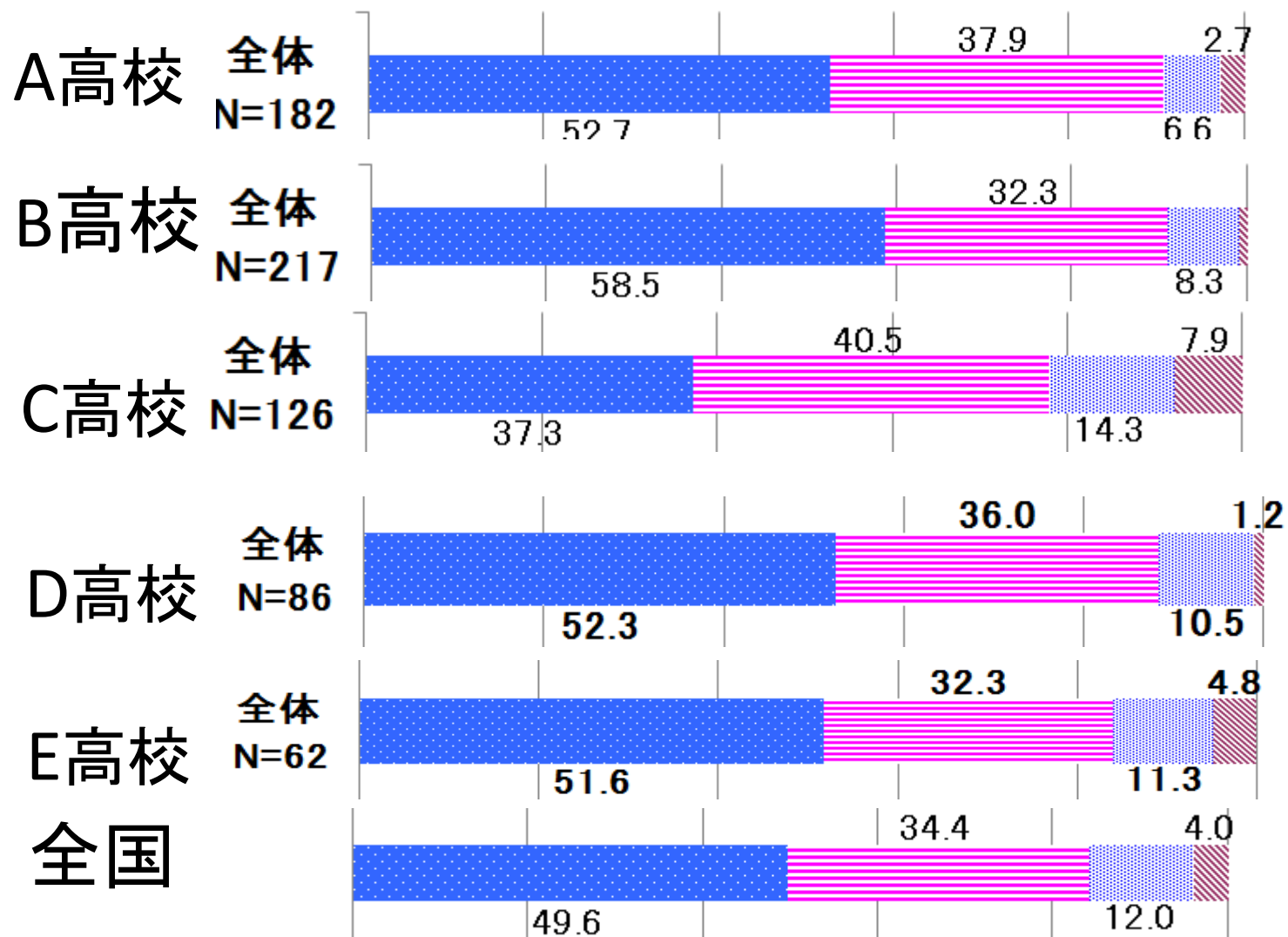
# アクティブラーニング参加状況



### (3) 豊かな対人関係と活動性

- 大学生研究が明らかにした学生の成長のためのポイントの2つ目は、「豊かな対人関係と活動性」である。
- これらの力は、高校では、各教科の学習はもとより、学校行事など「特別活動」などへの積極的参加によって育成されるものと考ええる。
- また、これらの力は、中教審においても「案」として示され、新しい教育課程においてカリキュラム化されようとしている。(初等中等教育分科会高等学校教育部会の審議まとめ案)
- 現時点において、生徒たちが自らの活動により成長したと感じているコアの力を紹介する。また、横田高校については、報告書p.57・図表20でより詳細に示す。

# 学校行事(体育祭や文化祭など)への積極的参加



対照群として挙げたC高校以外は、すべて全国平均を上回っていることを示している。

# 全ての生徒が共通に身に付けるべき 資質・能力「コア」

社会で自立し、社会に参画・貢献していく人材の育成を推進していく観点からは、「確かな学力」を構成する「学力の三要素」とともに、特に、次の力を、「コア」を構成する資質・能力の重要な柱として重視していくべきと考える。

- 社会・職業への円滑な移行に必要な力
- 市民性（市民社会に関する知識理解、社会の一員として参画し貢献する意識など）

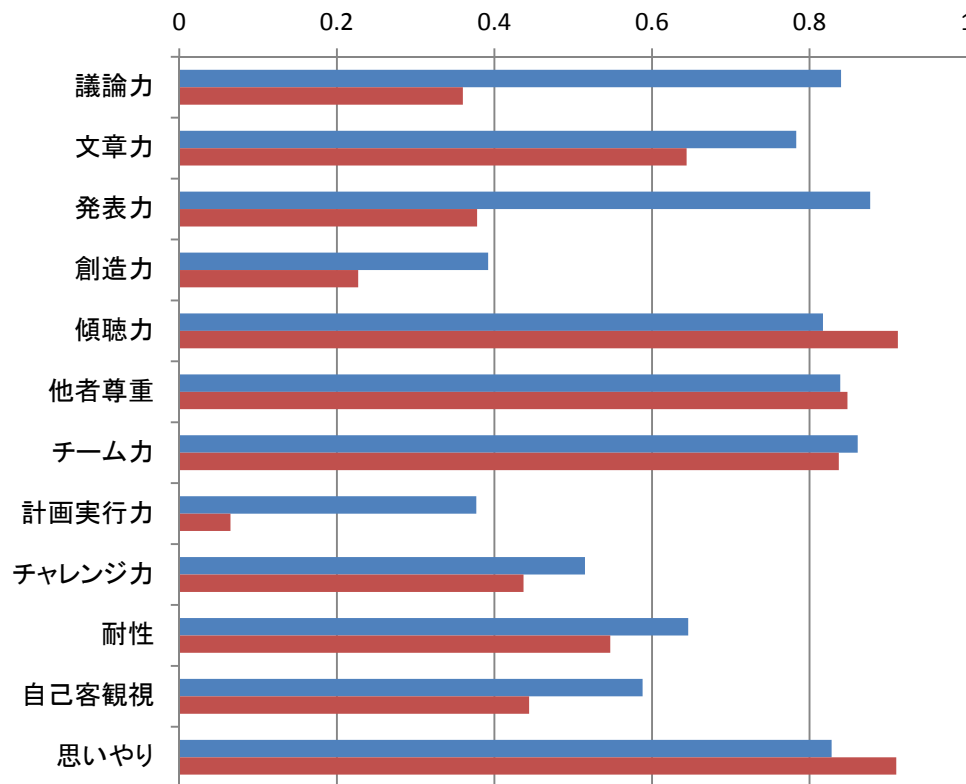
— 初等中等教育分科会高等学校教育部会の  
審議まとめ案（H26. 3）

# 「コア」を構成する資質・能力

- ・ 言語を活用して批判的に考える力、分かりやすく**説明する力**、**議論する力**
- ・ 新たな価値観や考え方を創り出す力やものづくり力などを含めた**「創造力」**
- ・ 多様な他者の考えや立場を理解する力や、相手の話を聴く力、コミュニケーション力などを含めた**「人間関係形成力」**
- ・ 自ら課題に挑戦していく力などを含めた**「主体的行動力」**
- ・ 今後の自分自身の可能性を含めて自らを肯定的に理解するとともに、自らの思考や感情を律し、今後の成長のために進んで学ぼうとする**「自己理解・自己管理力」**
- ・ 生徒が将来の進路を決定するために必要な**「勤労観・職業観」**、労働者としての権利・義務の理解など**社会的・職業的自立の上での基礎的・基本的な知識・技能**
- ・ 社会の発展に寄与する意識・態度などの**「公共心」**
- ・ 社会奉仕の精神、他者への**思いやり**
- ・ 健康の保持増進のための**実践力**

# コアの力がついてきているか？

例として、A高を取り上げて検証してみる。



右図のような生徒たちの成長感は、教科「探究」をはじめ同校のアクティブラーニングの成果であると考えられる。

ニュートラルな判断を0として、肯定的評価を1, 2, 否定的評価を-1, -2で数値化し、平均した。

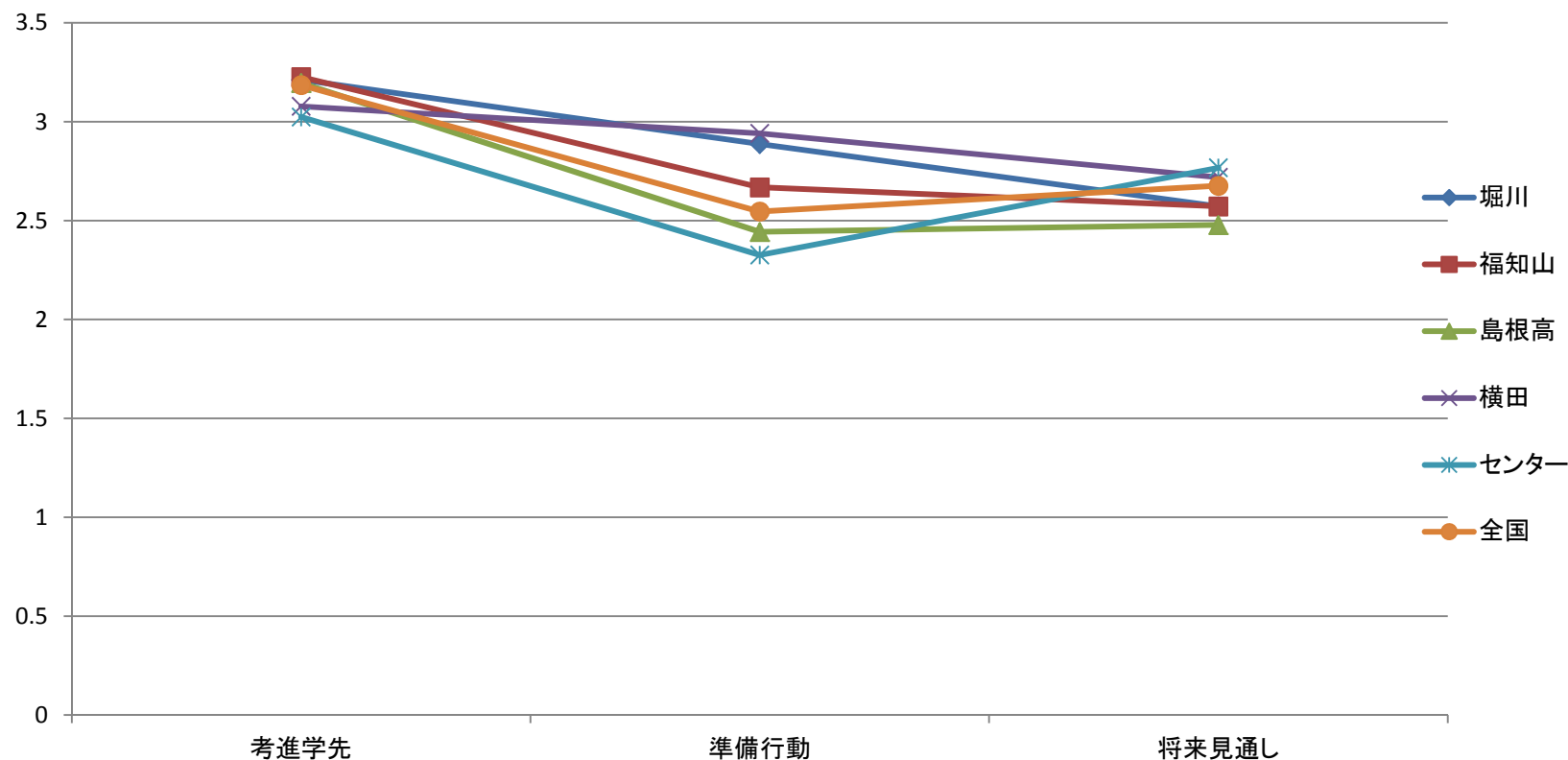
## (4) 将来への意識(キャリア意識)

溝上が「大学生の調査研究」から明らかにした「成長」のための3点目は、「将来の意識(=キャリア意識)」である。

高校生たちの「進学先選び」「進学のための準備行動」および「将来見通し」を調べてみた。



# 将来への意識の調査結果

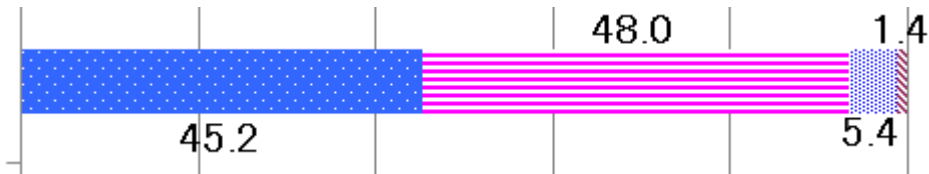


報告書p.24/図表11で示した結果と同様の傾向を、各高校が示していることがわかる。

ただし、堀川・福知山・横田は、将来見通しより進学準備を始めている。この点については、以下のように考える。

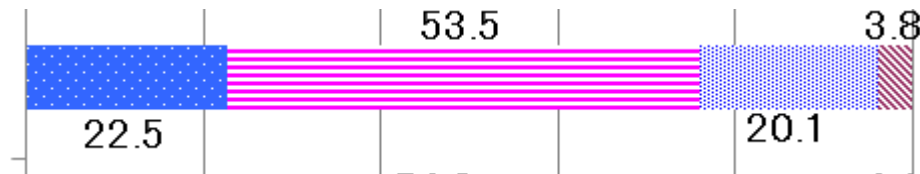
# 学校の進路指導(全国動向)

- 進学についての考える機会



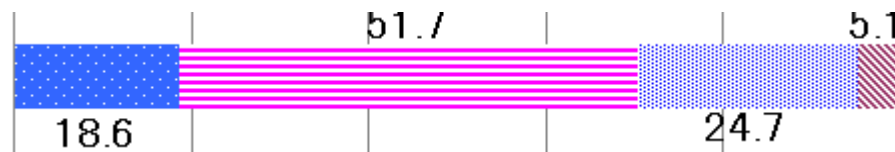
スコア: 3.37

- 就職や将来の職業について考える機会



スコア: 2.95

- 将来の生き方について考える機会



スコア: 2.84

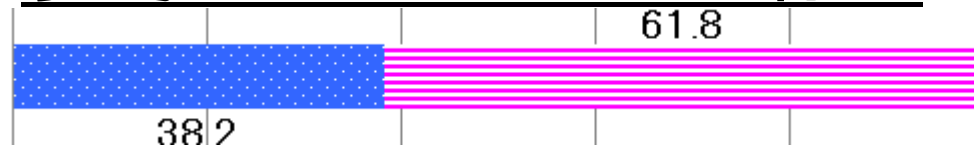
この傾向は、生徒の将来への意識に強く影響している。

高校2年生という時点において、生徒たちが持たされている偏差値や取り巻いている学校の雰囲気および家庭環境などによって、多様な進学先が選択できる偏差値上位校の生徒たちは、将来見通しをゆるく持ちながら進学準備にとりかかる。その反対に、偏差値下位校の生徒たちは、そうした条件を持たないがゆえに、限られた進路先を選択をせざるを得ない。しかしながら、進学先は決めていても準備行動へとは駆り立てられないで時を過ごしていると考えられる。

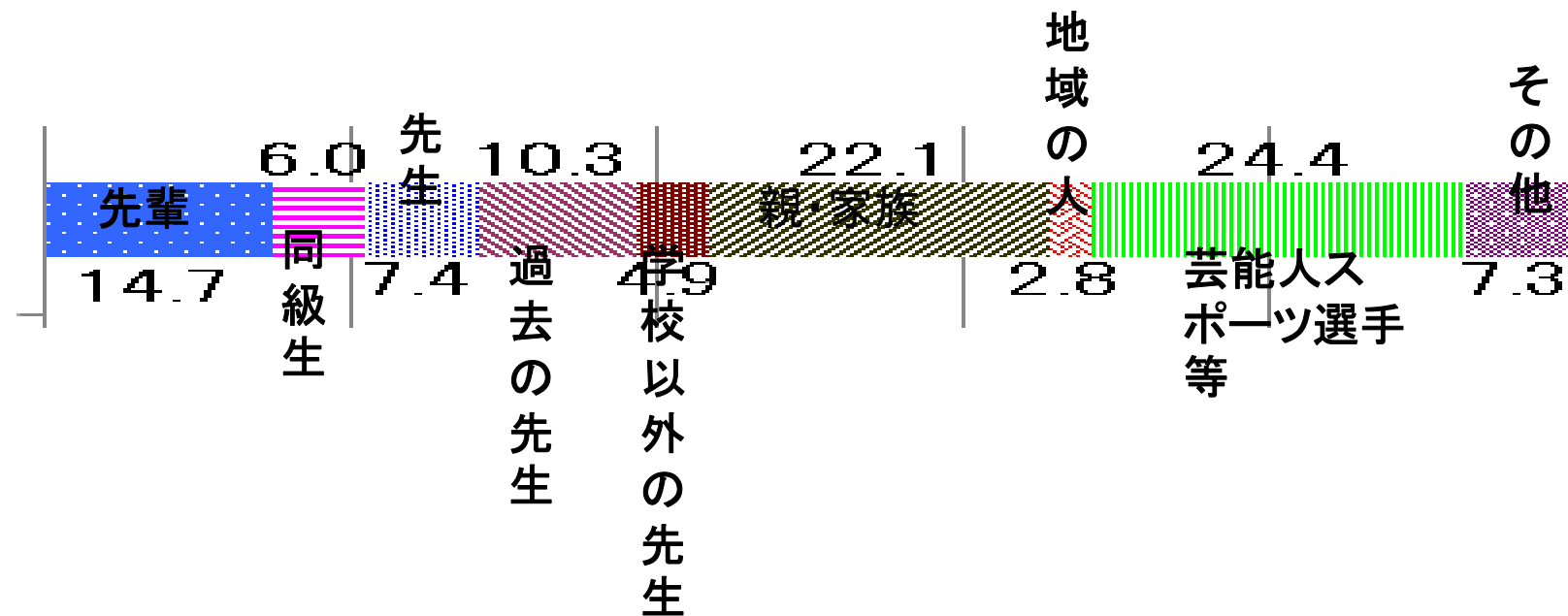
多くの進学校で、進学先選択のHRの時間などが持たれているのに対し、「どのような職に就きたいか」「どのような人生を過ごしたいか」といった生き方を含めたキャリア教育は、まだまだ十分でないことを示している。高校にはそうした課題を大学に先送りする構造がある。一方、おそらくは専門学校や実学的な学部選択をした生徒たちは、そうした「生き方」を少なくとも考えながら進路選択をしているものと考えられる。

# モデルの有無とモデル像

- 参考になるモデルの有無



理想の人はどのような人か。



高校2年生の段階では、生き方の参考になるモデルを6割の生徒たちは持っていない。また、存在していても「芸能人・スポーツ選手」など、具体性を持っていない。

# 役割モデルの不在は近代の特徴

溝上によれば「一般的に言えば、親・学校関係者と  
いった青年を大人にするべく関わるものはすべて、青年  
の職業選択・人生選択の具体的な役割モデルにはなら  
ない」(有斐閣選書「現代青年期の心理学―適応から自  
己形成の時代は―」)とあるが、全国調査のこの結果  
は、それを証拠立てることとなった。

同書の中で、溝上は、学校関係者ができることは「青  
年と大人を引き合わせて、彼らのしている仕事、生きて  
きた人生を具体的・直接的にみせ、そこから『あの人の  
ようになりたい』『こんな仕事がしたい』『何々さんのよう  
な人生にあこがれる』と比喩的に抽象化された生き方の  
方向性を見つけることにある」と述べている。これは、こ  
れからのキャリア教育の在り方を具体的に示している。

# まとめ

■ 今回の調査によって、高校生が7つのタイプに分類できることがわかった。そこで、事例として取り上げた学校において、どのタイプの生徒が多いかによって、「勉強タイプの生徒が多い学校」「部活タイプの生徒の多い学校」「交友通信タイプの多い学校」というように分類した。そして、それぞれのタイプの学校において、所属生徒の平日の家庭学習時間/部活時間及び休日のそれを調べた。すると、「勉強タイプの多い学校」>「部活タイプの多い学校」>「交友通信タイプの多い学校」の順に家庭学習時間が多いことがわかった。

■ 次に、これらの家庭学習の内容は「交友通信タイプの多い学校」>「部活タイプの多い学校」>「勉強タイプの多い学校」の順に学校の学習内容の予習・復習・課題が多く、主体的な学びから遠ざかっていることがわかる。また、そのことは生徒たちが学校の予習・復習だけでは、必ずしも授業内容を「理解」していないことを表している。こうした意味からも、生徒たちの主体的な学びを促進していくことが重要である。そのひとつの試みとして、教科における「活用型」の学習や教科外における「探求型」の学びを実践してみる価値がある。A高校、E高校の事例にみられるようにアクティブラーニングも有効である。

■豊かな対人関係と活動性については、中教審初等中等教育分科会において、今回初めて(平成26年6月)その具体的な姿を「全ての生徒が共通に身につけるべき資質・能力「コア」として示された。これについて、私たちの調査において、「活用・探究型の授業」や「アクティブラーニング」が、それらのコアの力を成長させ成果を上げている事例を紹介した。

■多くの進学校の進路指導は、出口指導にとどまっており、生徒一人ひとりの生き方を考えさせる進路指導(=キャリア教育)には、まだなりえていない。とはいえ、こうした進路指導の在り方は生徒たちの「進路意識」や「将来への意識」に対して大きな影響を与えている。学校、教員は、生徒を一人の青年としてとらえ、「自己形成」していくための支援をすることが望まれる。

## 今後の学校経営・学年運営などに生かす視点

- 生徒の一週間の活動時間を測定し、教室外学習時間を知る。
- 「知識」だけではなく、「知識＋活用」のカリキュラムや指導法の開発
- 「探求型」の学びを推進する「総合学習」の研究・開発
- 単なる進路指導ではないキャリア教育の視点
- 進路調査の再点検（少なくとも30年間の振り返り）。どのような生徒たちを作り、社会に送り出してきたのだろうか。社会の変化ともリンクさせつつ。（報告集p.71-77を参照）